知床五湖にて

桑原　宏

五月末から六月のはじめにかけて、知床五湖を訪ねた。昨年秋、斜里町で「知床一〇〇平方米運動」支援のチャリティ個展を開いた時に、地元の人々から六月の知床の美しさを訴えられたので、再度の知床行となった。

知床五湖は静かで、とても美しかった。一湖、二湖、三湖、四湖、五湖と廻って、約三キロの道程だが、湖と湖の間が原生林で蔽われていて、原生林が途切れると、ポカッと湖が現われる。ミズバショウや、ミツガシワの群生が静かに影を落として、ウグイスの谷渡りが鋭く空間を切りさく。

とても静かだ。残雪の知床連山が湖面に映って、遅咲きの桜が新緑の木々の間に鮮かなピンク色を落としている。しかし、この静寂には大古、人間と野生動物が共存した時代のおののきがある。怖れと、危害から己れを守る緊張感と――誰かが、ひそかに忍びよって、「わっ！」と背中で声を上げたら、夢中で走り出すような恐怖感がある。若いカップルがタクシーの運転手の案内で、二湖まで来た時にキャーッと声をあげた。蛇がいたらしい。二人は「もう二つ見たから、あとは見たことにして帰りましょう」といって五湖を去っていった。

知床五湖は下手をすると美しすぎて、観光絵ハガキになるおそれがある。清烈な自然をカンバスに描き写すには、それなりの「みそぎ」が画家には必要なのかもしれない。

北海道内の湖はだいぶ歩いた。然別湖畔などは十年近く通って、附近の国有林を描いた。でも、湖そのものを描いた作品は少ない。阿寒湖にしても摩周湖にしても、支笏湖にしても、同じような結果が出ている。これは、どうしたことだろう？

湖は生物のように変化する。朝、昼、夕方と四季おりおり、天候次第で素早く変化する湖は、捉えどころがない。捉えどころのないところが魅力なのだが、それはまた眺めているだけで満足するような雰囲気があるから困る。墨絵などの材料の方が湖の描写には適しているのかもしれない。

ロシア民謡の「バイカル湖のほとりにて」を聞いていると憂愁をおびた暗い湖を想像していたが、現実のバイカル湖は、あっけらかんとして、とらえどころもなく、明るい湖だった。湖というより、海のような広がりがあった。ここでも僕は湖を描かずに湖畔の松林を描いた。どうにもバイカル湖は手にあわなかったのである。それに比べると、スイスのレマン湖はちょっと観光化してはいるが、自然と人間が、どことなく美しく融合していた。自然の美しさをこわさないようにいろいろな配慮をしたせいだ、と思う。しかし、ここでも僕は湖を主体にしたスケッチは描かなかった。

画家にとってというよりも僕自身にとって、あまり漠々とした湖の風景は、よほどの腕がない限り描けないのかもしれない。知床を訪ねて一ヵ月、まだ頭の中で五湖の風景が「絵」になっていない。苦悩の連続である。しかし、だんだん知床五湖が描けそうな気分になってきた。こんどこそ「湖アレルギー」をとっぱらって「湖」が描けるかもしれないという夢を大事にしたい。

（画家）